

## 本市の全国学力・学習状況調査結果概要

令和8年1月

本調査の目的は、全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、その成果を検証して学習指導の改善を図ることなどであり、平成19年度から文部科学省が実施しているものです。今年度の調査は、4月14日から17日に悉皆で行われ、本市では、全校にあたる小学校13校（6年生510名）、中学校10校（3年生481名）が参加しました。

調査内容は、小学校が国語、算数、理科、中学校では国語、数学、C B Tによる理科が実施され、学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題が出題されました。また、調査する学年の児童生徒を対象とした学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸侧面等に関する児童生徒質問紙調査と学校（学校長）を対象とした指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する学校質問紙調査が実施されました。

本市小学校においては、国語、算数、理科ともに平均正答率で全国とほぼ同じという結果となりました。国語の、「言語の特徴や使い方に関する事項」に関しては、基本的な言語能力の定着が見られた一方で、「話すこと・聞くこと」の「集めた材料を分類したり関係付けたりすること」や「読むこと」の「書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落を作って、文章の構成を考えること」については課題が見られました。算数では、「図形」の「方眼上の5つの図形の中から台形を選ぶこと」、「変化と関係」の「生活の中での予想に必要な事柄を選ぶこと」について課題が見られました。理科では、「生命」「地球」について定着が見られた一方、実験場面における条件制御や、顕微鏡などの実験器具の使い方についての問題、場面や題意を適切に把握し、情報の整理が必要な問題に課題が見られました。

本市中学校においては、国語は平均正答率で全国とほぼ同じ、数学は少し下回りました。理科では、全国をやや上回り、特に「記述式」の問題形式ではほとんども問題で上回りました。国語は、「言語の特徴や使い方に関する事項」や「相手に応じて分かりやすく伝える工夫をすること」に関して基本的な言語能力の定着が見られた一方、「話すこと・聞くこと」の「資料や機器を活用し、分かりやすく伝える工夫をすること」や「書くこと」の「目的に応じて材料を整理し、内容を明確にすること」について課題が見られました。数学では、「数と式」の領域で全国を上回った一方、「図形」「関数」の領域で全国平均よりやや低く、「図形」の「平行四辺形であることの証明を完成すること」、「関数」の「1時間数で $x$ の増加量が2のときの $y$ の増加量を求める」とについては課題が見られました。理科は、「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」で定着が見られた一方、評価の観点が「知識・技能」の問題や、仮説が正しい場合の結果を予想する問題に課題が見られました。

質問紙調査からは、小学校・中学校ともに、「将来の夢や目標をもっている」「地域や社会をよくするために何かしてみたい」との回答が全国平均を上回っていました。キャリア教育や由利本荘市の地域を素材としたふるさと教育が児童生徒によりよく反映されていることが分かる結果となりました。その一方、1日あたりの学習時間は昨年度と同様に減少傾向にあります。また授業でのI C Tの活用については、4年連続増加していますが、全国と比較すると下回っている状況です。放課後の時間とI C Tのより有益な使い方について、さらに改善していく必要があります。

令和8年度の調査については、国語、算数・数学、C B Tによる英語の3教科及び児童生徒質問紙について悉皆により実施されます。今後も、児童生徒の学びの状況を確認しながら確かな学力を育み、未来に向かってたくましく生きる力を身に付けさせることができるように、児童生徒一人一人に寄り添った指導の充実が一層期待されます。

## 小学校国語について

領域ごとの正答率を比べると、すべての領域で全国平均と同程度の結果となっております。また、「言語の特徴や使い方に関する事項」に関しては、基本的な言語能力の定着が見られます。

一方、「話すこと・聞くこと」の「集めた材料を分類したり関係付けたりすること」や「読むこと」の「書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落を作つて、文章の構成を考えること」については課題が見られます。

### 【目的や内容に応じて内容を検討する】

話す活動では、目的や意図に応じて集めた材料を整理することが必要です。材料を分類したり、関係付けたりする際には、複数の観点でグループ化するなど、目的や意図に沿った分類を意識することが重要です。

また、整理した情報をペアやグループ、全体で共有する際には、分類の意図や理由を児童が説明する活動を取り入れると効果的です。

## 中学校国語について

領域ごとの正答率を比べると、すべての領域で全国平均を上回っています。また、「言語の特徴や使い方に関する事項」や「相手に応じて、分かりやすく伝える工夫をすること」に関しては基本的な言語能力の定着が見られます。

一方、「話すこと・聞くこと」の「資料や機器を活用し、分かりやすく伝えること」や「書くこと」の「目的に応じて材料を整理し、内容を明確にすること」については課題が見られますので、指導を一層充実させが必要です。

### 【資料等を活用して分かりやすく伝える】

自分の考えを伝える際に資料や機器を適切に活用することは、話し手の意図を正確に伝えるだけでなく、聞き手の理解を深めることにもつながります。

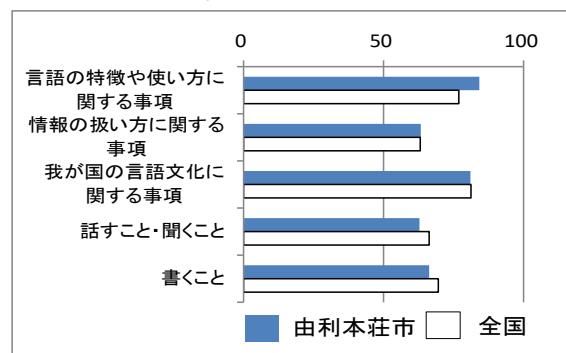
授業では、資料や機器を用いて伝え合う言語活動を設定し、それらの特徴や効果について話合うことで、表現の工夫への理解が一層深まります。

## 質問紙調査から<国語の学習について>

国語の学習については、中学校において全ての項目で「当てはまる」「どちらかといえど当てはまる」の合計が、全国の数値を上回っており、小学校は全国と同程度の結果となっております。また、90%以上の児童生徒が「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」と回答していることからも、児童生徒が実生活や社会生活における国語の有用性を実感しながら、授業に取り組んでいることがうかがわれます。

今後も、児童生徒が国語の授業で身に付けた力を日常生活や社会で生かせるよう、目的に応じた言語活動の充実を図り、児童生徒が自ら考え、表現する力を育てる授業改善を推進していくことが望まれます。

## <小学校 国語（領域）の正答率>

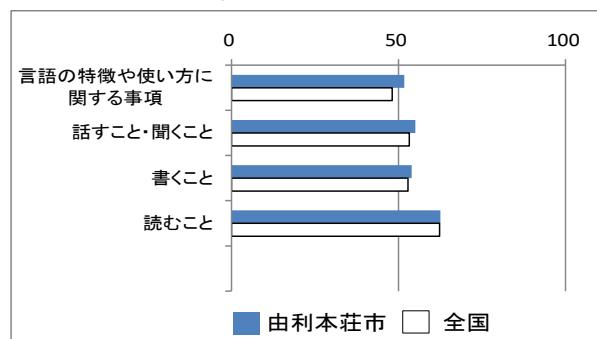


### 【文章の構成を考える】

読み手に分かりやすい文章を書くためには、まず、最も伝えたいことを明確にし、関連する内容をまとまりごとに整理し、段落を構成することが大切です。また、段落の役割や順序を工夫する意識を高めるために、文章を書く前に構成メモを作成することも有効です。

こうした学習は、新聞やリーフレットなど、児童にとって身近な形式にまとめて書く言語活動を通して行うと効果的です。

## <中学校 国語（領域）の正答率>



### 【目的や意図に応じて材料を整理する】

分かりやすい文章を書くためには、書き手が目的や意図を具体的にイメージし、書くための材料を適切に取捨選択することが重要です。

説明する文章を書く際は、目的に応じて観点ごとにまとめたり、共通点を見つけて分類したりして情報を整理する活動を行うと効果的です。

## 小学校算数について

平均正答率を見ると、数と計算、測定、データの活用の領域は同程度ですが、特に図形、変化と関係の領域で全国平均より低い数値を示しております。また、観点別では、思考・判断・表現において、全国平均を下回っています。

「図形」の「方眼上の5つの図形の中から台形を選ぶこと」、「変化と関係」の「生活の中での予想に必要な事柄を選ぶこと」については課題が見られますので、指導をより一層充実させすることが必要です。

### 【方眼上の5つの図形の中から台形を選ぶ】

台形を3つ選ぶ問題ですが、正解と同程度の割合で、「直角を含む台形」を選択していない誤答が見られました。

4年生で垂直や平行の学習の中で台形や平行四辺形を扱いますが、「向かい合った1組の辺が平行な四角形」という言葉の定義を大切にしながら、いろいろな台形や平行四辺形をかいたり選ばせたりする指導により、感覚的にも特徴をつかむことで改善を促すことができると考えます。

## 中学校数学について

平均正答率を見ると、数と式、データの活用の領域は全国平均をやや上回っており、図形、関数の領域で全国平均よりやや低い数値を示しています。

「図形」の「平行四辺形であることの証明を完成すること」、「関数」の「1次関数でxの増加量が2のときのyの増加量を求める」とについては課題が見られますので、指導の工夫、充実が必要です。

### 【平行四辺形であることの証明を完成する】

すでに完成している他の証明の一部を直すことで、新たな事柄を証明できる問題です。直す箇所は見付けていても正しく記述できていないというのが、主な誤答でした。

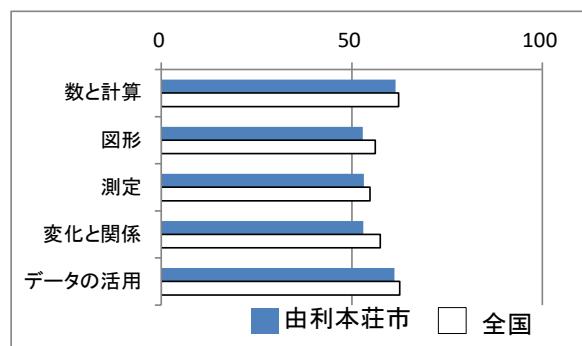
証明問題では、図が変わっても、等しい、あるいは平行などが変わらない部分と、図が変わることによって変わってしまう部分があります。仮定(条件)を図に書き込み、場面を視覚的に捉えることが効果的です。

## 質問紙調査から<算数・数学の学習について>

算数・数学の学習への意識については、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計が、小・中ともほとんどの設問で全国の数値を上回っており、望ましい状況が継続しています。小学校では、「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」が92%を超える回答となっています。中学校では、「数学の授業で学習したことを、普段の生活で活用できている」「数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っている」の設問で、全国平均より+10ポイント以上となっています。

しかし、算数、数学ともに「授業の内容はよく分かる」の設問が全国平均より下回っていることが課題です。学習への関心を高められる授業の導入や、理解や定着を確認する問題等を通して、分かる、できるを実感できる授業改善の継続が求められます。

## <小学校 算数(領域)の正答率>

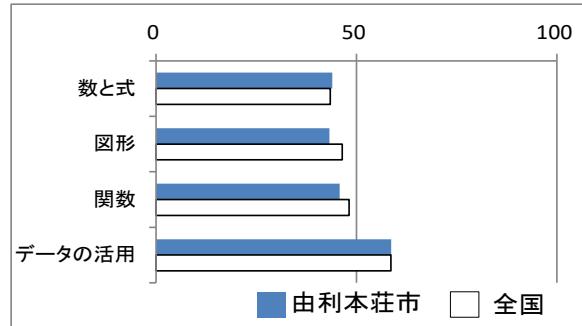


### 【生活の中での予想に必要な事柄を選ぶ】

「1日に普ッシュする回数の平均」を選ぶ誤答が見られ、「空になるまで何回普ッシュができるか」という問題に対し「回数」に目が向いたものと思います。

もともとする量が「残っている液体の量」ですので、単位に注目して「1回で出る液体の量」と比べる必要があります。「1あたりの量」を使う考え方とは、比例関係の場面(時間=道のり÷速さ、個数=代金÷値段等)で確実に身に付けさせたいところです。

## <中学校 数学(領域)の正答率>



### 【1次関数でxの増加量からyの増加量を求める】

$y = 6x + 5$ で、xの増加量が2のときのyの増加量を、 $y = 6 \times 2 + 5$ とする誤答の割合が、正答の割合を上回りました。

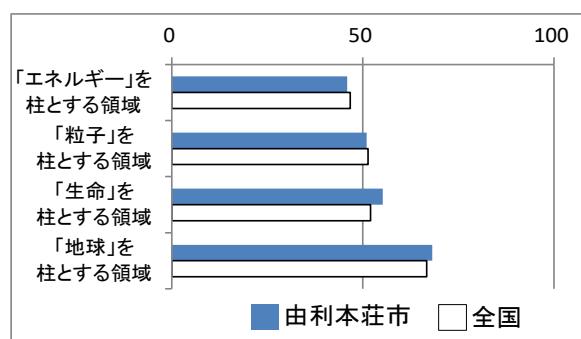
関数では、xやyの値、xやyの増加量、変化の割合等の混同しやすい用語が多く、イメージしにくいことが要因と考えられます。生活場面の例を挙げ、値や増加量等が表す事柄を具体的に考え、式や表と対応させて意味の理解を進めることが大切です。

## 小学校理科について

各領域の結果を比較すると、「生命」「地球」が全国より高い平均正答率となりました。また、評価の観点で比較すると、「知識・技能」「思考・判断・表現」がともに全国より高く、問題形式で比較すると、特に「記述式」で全国平均正答率を11ポイント上回る結果となりました。

一方、実験場面における条件制御や、顕微鏡などの実験器具の使い方についての問題、場面や題意を適切に把握し、情報の整理が必要な問題に課題が見られました。

## ＜小学校 理科（領域）の正答率＞



### 【条件制御を児童が考えていく授業展開】

調べたい条件だけを変え、その他の条件を全てそろえて実験を行う「条件制御」は、小学校4年生から始まります。どの学校でもしっかりと取り組んでいる様子が見られます。教師が条件制御を設定するのではなく、児童が考えて条件制御を発案する時間を確保すると、さらに児童の思考力や判断力が向上し、複雑な問題や初めて見る問題へも対応できると考えられます。

### 【学んだことを自分の言葉で表現する活動の充実】

小学校の発達段階においても学んだことを児童自身の言葉でまとめたり、既習事項を活用して問題を解いたりすることが大切です。インプットしたことを再構築し、アウトプットする活動が、児童の「思考力・判断力・表現力」を高めます。単元や授業の中に表現する活動を適切に設定していくことが重要です。

## 中学校理科について

理科は今年度、タブレット端末を利用した調査となり、公開されている問題と非公開の問題で実施されました。「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の全領域を総合すると、全国のスコアを上回る結果となりました。特に「記述式」の問題形式では、ほとんどの問題で全国を上回り、15ポイント以上も上回る問題がありました。

一方、評価の観点が「知識・技能」の問題や、仮説が正しい場合の結果を予想する問題に課題が見られました。

### 【知識・技能のより確実な定着】

既習の知識を活用して考える問題の正答率が低い傾向が見られました。授業を通して知識を確実に身に付けるとともに、それを身の回りの事象と関連付けて捉え、表現する活動を多く取り入れることが必要です。学んだことを捉え直す機会を重視することで、知識・技能の定着をより一層図ることができます。

### 【実験計画の妥当性を検討・改善する力の育成】

実際の授業場面を想定した問題が複数出題されていました。生徒一人一人が仮説を立て、その仮説が正しい場合には、このような結果になると予想する場面を設定することが大切です。また、生徒間で検討・改善することで、生徒の理科における見方・考え方方が育成されます。

## 質問紙調査から＜理科の学習について＞

「理科の勉強が好き」と回答している割合が、全国平均と比べて小学校では6.1ポイント、中学校では14.4ポイント高くなっています。また、「将来、理科や科学技術に関する職業に就きたい」という質問では、小学校が7.1ポイント、中学校が8.6ポイント上回っていて、県平均をも上回っています。

理科における全ての質問において、小・中学校とも全国平均を上回り、児童生徒が理科を肯定的に捉え、前向きに学習に取り組んでいることが分かりました。特に中学生においては、ほとんどの質問で県平均を上回っていました。全ての小・中学校で児童生徒の主体的で対話的な活動を重視した授業づくりや、学習内容と日常生活との関連を図る工夫がなされていることが、よい結果につながっていると考えられます。

## 児童生徒質問紙について

質問紙調査は、小学校、中学校ともに、学習習慣、生活習慣等幅広く質問されています。その中で注目すべき項目や今後に生かせる項目について掲載しました。なお、この調査では小学校6年生、中学校3年生が回答しています。

### 1 【自分には、よいところがあると思いますか】

質問番号 (5) 《当てはまる、どちらかといえば当てはまる割合の合計》

小学生86.3%、中学生87.3%が自分には、よいところがあると思うと回答しています。昨年度と比較すると小・中学生ともやや上回り、全国平均並みの結果でした。

今後も道徳教育や学校行事等において体験活動の充実を図り、様々な面

から児童生徒が自分を見つめ直したり、自分のよさを生かし活躍する場を確保することが大切です。さらに学校生活全体を通して、自己有用感を高めることができるよう、児童生徒が互いを認め合い、高まり合うことができる学級・学校づくりを継続していくことが求められます。

### 2 【将来の夢や目標をもっていますか】

質問番号 (7) 《当てはまる、どちらかといえば当てはまる割合の合計》

小学生88.0%、中学生77.1%が将来の夢や目標をもっていると回答しています。昨年度と比較すると中学生が大きく増加しています。全国平均を上回る結果で、県平均と比較してもやや高い結果あります。

校外学習や職場体験、ふれあいPR事業などキャリ

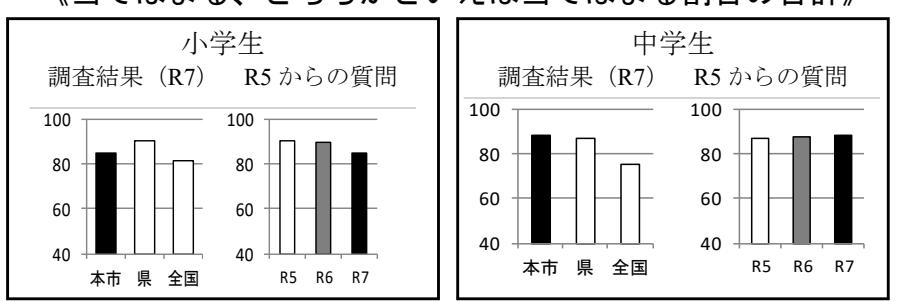
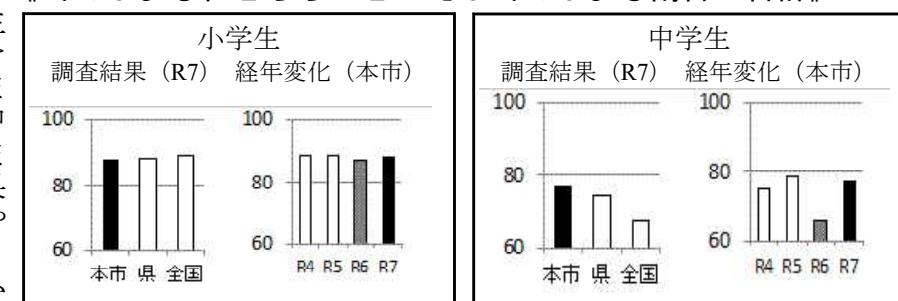
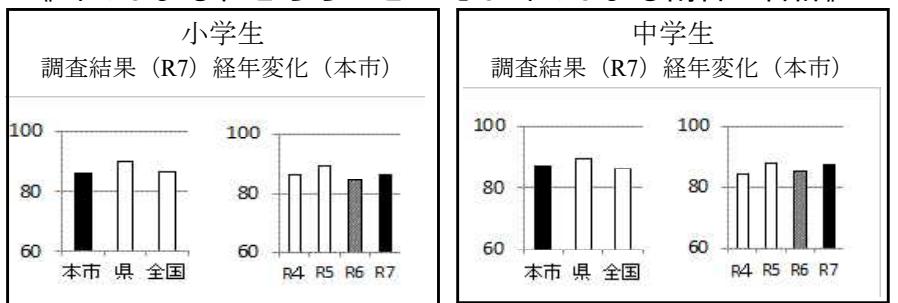
ア教育に関する様々な活動を通して、地域の方々と触れ合い、ふるさとのよさを見つめ直したり、将来の生活について考えたりする機会の充実が結果に表れたと考えます。また、毎日の授業の中で、児童生徒が自分の意思や意見をもち、選択し自己決定していく場面を数多く取り入れた授業展開が、主体的に行動したり努力したりする態度を育んでいくことにつながったと考えられます。

### 3 【地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか】

質問番号 (27) 《当てはまる、どちらかといえば当てはまる割合の合計》

小学生84.7%、中学生88.2%が地域や社会をよくするために何かしてみたいと回答しています。昨年度から新設された質問で、昨年度同様、全国平均を小・中学生とも上回っている結果となりました。

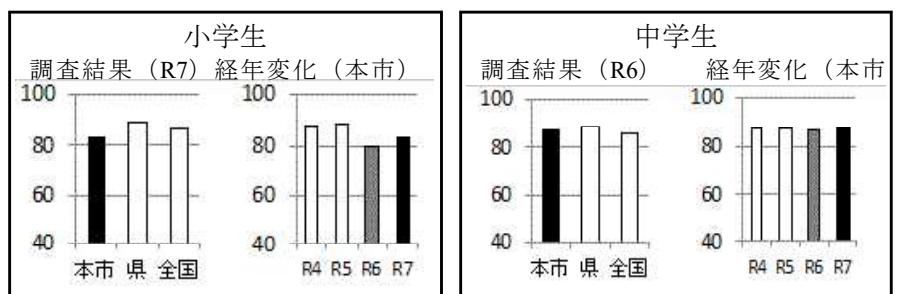
引き続き、日々の授業や学校行事などで地域の方々から支えていただいていることに感謝しながら、支援が一方通行にならないように、ボランティア活動に参加したり、「地域や社会のために自分たちができることは何か」を考えたりして、実践できる子どもを育していくことが大切です。今後も、カリキュラム・マネジメントを基盤とした教育課程を工夫し、地域とともにある学校づくりを目指していくことが重要だと考えます。



#### 4 【学校に行くのは楽しいと思いますか】

質問番号 (12) 《当てはまる、どちらかといえば当てはまるの割合の合計》

小学生の82.9%、中学生の87.5%が学校生活を楽しいと感じており、全国平均より、中学生の回答において数値が少し上回っています。各学校では、定期的な面談やアンケートを実施し、児童生徒の実態を的確に把握したり、悩みや問題に迅速

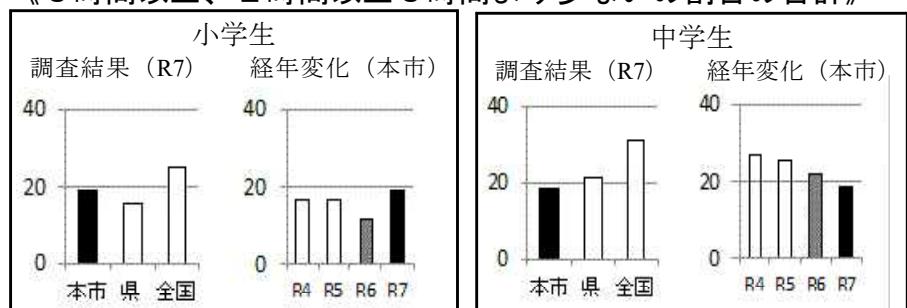


に対応したり、一人一人に寄り添う支援をしています。また、体験学習や学校行事を通して、児童生徒の活躍の場面を増やしたり、お互いを認め合える機会を意図的に設定したりして日々の授業改善に取り組み、誰にとっても分かりやすい授業を心がけています。今後も、さらに一人一人が自分のよきを發揮し、充実した学校生活を送り、より多くの児童生徒が「楽しい」と実感できる学校・学級づくりが必要であると考えます。

#### 5 【学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）】

質問番号 (17) 《3時間以上、2時間以上3時間より少ないの割合の合計》

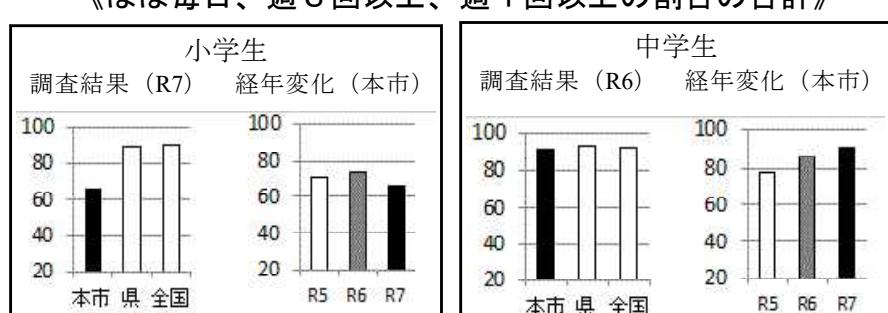
授業以外で2時間以上学習している小学生の割合は19.0%、中学生の割合は18.7%で、小・中学生ともに全国平均を下回り、経年変化を見ると、中学生は昨年よりも数値が減少しています。児童生徒が自分の学習への取組を振り返るとともに、余暇の過ごし方を含め、家庭での時間の使い方について考える必要があります。また、保護者面談や学校・学級通信等で話題にしながら、保護者に協力を呼びかけていくことも必要だと考えます。



#### 6 【5年生までに（1・2年生のときに）受けた授業で、P C・タブレットなどのI C T機器を、どの程度使用しましたか（R3からの質問事項）】

質問番号 (28) 《ほぼ毎日、週3回以上、週1回以上の割合の合計》

小学生の65.9%、中学生の91.0%が昨年度まで受けた授業で、週1回以上I C T機器を使用したと回答しています。中学生の経年変化を見ると、年々割合が増加していることが分かります。各校において、校内研修会や情報教育担当からの情報



提供等を通し、I C T機器の活用の充実が図られ、活用頻度が増えていると考えられます。また、市でもI C T活用研修会を実施し、新しく導入した学習支援ソフトの研修や情報提供を行い、各校で伝達するよう働きかけています。今後も、校内外の研修会等を通して、教師のI C T活用能力を高め、授業の中で適切な場面で効果的にI C T機器を活用していくことが大切であると考えます。